青　木　澄　夫*
Sumio AOKI *

明治末期のシンガポールの日本人社会
幻の日本人会成立と日本語新聞

Japanese Community in Singapore at the End of Meiji Era
Unapproved Japanese Association and Japanese Language Newspapers

序　シンガポール日本人会

2015年9月12日、シンガポール日本人会は創立100周年を迎える。第二次世界大戦の混乱で日本人会は解散したが、現在の日本人会は100年前のこの日を創立日として継承している。

戦後に設立されたシンガポール日本人会は、今までに『南十字星―シンガポール日本人社会の歩み―』(1978年)、『シンガポール日本人墓地　写真と記録』(1983年)、その『改訂版』(1993年)、『戦前シンガポールの日本人社会　写真と記録』(1993年)、その『改訂版』(2004年）などの貴重な資料を刊行し、また1937年に南洋及日本人社が刊行した『シンガポールを中心に同胞活躍　南洋の五十年』を復刊している[1)]。

シンガポールの戦前の日本人社会を描いたものには、Lim Shao Bin“Images of Singapore from Japanese Perspectives(1868-1941)”『日本人が見たシンガポール　明治・大正・昭和（戦前)』(2004年)[2)] や、西岡香織『シンガポールの日本人社会史』(1997年)[3)]、清水洋。平川均『からゆきさんと経済進出　世界経済のなかのシンガポール－日本関係史』(1988年)[4)]、からゆきさんについての James Francis Warren “Ah Ku and Karayukisan Prostitution in Singapore 1870-1940”[5)] などがある。

シンガポールの初期の日本人社会を扱った文献で最も詳しいのは、南洋及日本人社が刊行した『南洋之現在』(1926年）と『シンガポールを中心に同胞活躍　南洋の五十年』(1937年）である。『南洋之現在』は、雑誌『南洋及日本人』刊行10年を記念したもので、当時の日本人の動静を詳細に記述している。一方『シンガポールを中心に同胞活躍　南洋の五十年』も、南洋や在留日本人の状況と歴史を詳細に記述した大冊だが、憶測や1912年に刊行された塩見平之助の『南洋発展』などの受け売りがあり、利用するには注意が必要である[6)]。

他には、『南洋及日本人』の創始者である佃光治の著作や、『馬来に於ける邦人活動の現況』(1917年)、『新嘉坡てびきぐさ』(1926年)、新嘉坡日本人倶楽部の『赤道を行く』(1932年、再版42年）などが参考になる[7)]。

一方、戦前期に日本国内で刊行されたシンガポールについての文献目録は、『マラヤ占領期文献目録（1941－45年)』(2007年）に付された「戦前期日本マラヤ関係文献目録」だが、シンガポールで刊行された『南洋画報』(1911年)、雑誌『南洋時代』(1930年代）や、ペナンで編集された『南洋群島写真画帖』(1914年)などの重要な文献が欠落しており、これだけに依拠して日本人社会を言及するのは不十分である[8) 9)]。

明治末期の1910年ころには、東西交通の要所であったシンガポールをはじめ、「南洋」を

*中部大学国際関係学部国際関係学科

とりあげた書籍は思いのほか多数刊行され、『南洋画報』などの写真集には、日本商店や日本人経営のゴム園状景が多数収録されている。

本稿は、1910年に一度は成立した日本人会を中心に、それ以前の歴史を概観しながら、明治末（1912）年までのシンガポール日本人社会について、当時の邦文新聞、書籍、外交史料などを基に、描写するものである。日本人会が成立した1915年ころまでの日本人社会については続編とする予定である。

なお、本稿で扱う時代、シンガポールは、星嘉坡、新嘉坡と混同して使用されている。また、資料により事項の発生した年代については異なることもあり、判別に苦慮する点もある。在留邦人の人口については、外務省外交史料館史料に基づいている[10)]。

１．1909年までのシンガポール情報

『シンガポールを中心に同胞活躍　南洋の五十年』を初め、各種資料からみて、シンガポールには、明治の初めころから女性を中心に日本人が住み始めていたようで、1881（明治14）年には、男８名、女14名の22名の日本人が在住していたといわれる。

1885年、邦人商店の元祖と言われている中川商店が、呉服・食糧品の店を開いた[11)]。

1987年11月23日の朝日新聞は、東京の貿易商小西常七がシンガポールのノースブリッジの福山庄次郎の店に雇われて、出立する旨を広告で報じた。小西、福山については不詳である。

日本人の動静がはっきりしてくるのは、明治22（1889）年１月に中川恒次郎が副領事として日本領事館を開設した時からである。その年末には男16名、女186名、計202名の在留邦人が在住し、２軒の日本人が経営する小さな店があった。在留邦人の90％以上を女性が占めていた。

中川を初め領事が政府にあてた領事報告は、時々各紙の紙面に登場し、89年12月27日の『東京朝日新聞』は、中川が試売品として輸出された陶器、玻璃器、傘、石鹸、鉄器などの将来性を伝えている。

1889年７月、二木多賀治、渋谷銀治、中川菊三は、日本人墓地の使用許可を現地政府から取得した。二木が日本人墓地を計画したのは1888年11月のことで、スラングに土地を取得後、刑人墓地に埋葬されていた27名の白骨を墓地に改葬した。日本人墓地に現存する最も古い墓石は1889年12月13日に亡くなった佐藤登満のもので、使用承認が得られる前から墓地は開設されていたものと考えられる。日本人墓地開設の経緯や歴史については、日本人会刊行の『シンガポール日本人墓地』に詳しい[12)]。

日本人墓地の誕生とともに、二木たちは互助組織として慈善会（後に共済会と改称）を結成し二木が会長になった。会費は25銭、会は会員が亡くなると日本人墓地に埋葬し、死亡した旨を日本国内の遺族に通知するなどの便宜を図った[13)]。

南洋の女衒として名をはせた村岡伊平治は、シンガポール在住時代に日本人会の必要性を認め、89年７月頃に日本人会設立を試みたと『村岡伊平治自伝』で語っている。会の設立のために「女郎屋」の親分である二木富治、渋谷銀治、屋賀部、加藤や女将などをあたって、翌90年２月には200円ほど基金ができた。念願の日本人墓地の確保のめども立ったので、三井出張所の井上を訪ねて、墓地購入資金の借り入れを申し入れたが断られた。手下を率いて再び訪問し領事も立ち会って、結局三井は200円、領事が50円を寄付したという。日本人会は90年10月に発足し、会長は二木、副会長は小西、村岡は会計顧問を務め、井上は評議員となった、という[14)]。

村岡の自伝については、『南進の系譜』の著者矢野暢をはじめ、信憑性を否定する向きが多

い。日本人会（慈善会のことだろう）についての記述も、領事の姓は記されておらず、二木、矢ヶ部の名前やその出自も正確ではない。19歳の青年福井菊三郎が、バッテーリー・ロードのニュービルディングに三井物産の支店を開設したのは、1891年7月1日のことだった[15]。

1893年、釋種楳仙師がシンガポールに到着した。94年1月4日の『読売新聞』は、長崎県の皓臺寺がシンガポールに派遣した楳仙から、仏像及び仏具送付の依頼があったので、同寺は3日の便で釈迦仏坐像、半鐘、木魚などを送付したことを報じた。村岡は1891年10月にシンガポールで京都本願寺の「釋楳仙」に出会い、寺建立の相談をしたと言っている。村岡の説明は、年代が合わないうえ、釋種楳仙は曹洞宗の僧だった[16]。

94年、シンガポールで最初の邦人医師となる中野光三が到来した。

日清戦争が開戦すると、1895年3月にシンガポールの在留邦人は、二木多賀治を惣代として69名が510円を海軍に、渋谷吟治を惣代として71名が580円を陸軍に軍資金として献金した[17]。ちなみに明治時代の人たちは名前の音があっていれば、表記はあまり気にしなかったようで、二木は多賀二郎、多賀治郎、多賀次（郎）など、渋谷も銀次、銀治、吟治などと書かれていて、本人たちもあまり気に留めなかったようだ。

95年8月、シンガポールで雑貨店を経営していた大川清たちが、千葉県から漁夫を連れてきて漁業を開始した[18]。大川は80年代からシンガポール周辺で活動していたらしい。

1896年、シンガポールの主な日本商店は、三井物産、大井商店、乙宗商店だった。

馬城将軍と言われた大井憲太郎は、95年に中国人李綠雲と共同経営でシンガポールに大井商店を開設し、国内にも大阪と東京に貿易会社を設立した。そして96年2月に実業家11名を連ね、インドのカルカッタ、スリランカのコロンボで調査するために神戸から広島丸で発っている[19]。しかし、大井の店はしばらくして撤退した。中野光三は大井の商売を次のように評した。

> 新嘉坡は岩本（千綱）氏に引続いて又一代の奇人を迎へた。それは、社会のすね者として有名な馬城将軍大井憲次郎氏である。（略）議論に於ては当代の一人者であっても商売に掛けては頗る不得手で、一年たつや経たないうちに滅茶苦茶に壊して了った[20]。

大井に南洋貿易を勧めた梅谷庄吉の愛人トメ

図1　三根英一（左）と友人

図2　日本女性の写真
（三根が所有していた）

子は、このころ写真店を開業したという[21)]。

1897年6月23，24日に開催されたイギリス王祝典に際し、在留邦人は打ち上げ花火を挙行し、現地新聞各紙が称賛するほどの喝さいを受けた[22)]。在留邦人は増加し、同年末には、男158名、女456名の計614名になった。

98年、本願寺から開教視察使として派遣された土岐寂静と朝倉明宣がシンガポールを訪問した。土岐は病に侵されていて、医師三根英二に診察を受けたという[23)]。三根英二とは佐賀県出身の三根英一のことで、ヴィクトリア・ロード371で東亜医院長を務めていた人物である。筆者の手元には三根がロビンソン・ロードの丹野商会支配人根本や店員兼松と一緒に撮った写真や和服姿の日本女性を撮影した写真がある。(図1、2)

99年、本願寺の佐々木千重は佐々木芳照とともに伝道を開始し、8月にはヴィクトリア街に布教場を設置した[24)]。

99年9月18日付の『東京朝日新聞』に寄稿した、ケイ・エス生によれば、シンガポールには日新館、扶桑館、松尾旅館（マラバーストリート）の旅館があった。同紙9月28日はシンガポール在留邦人を、男188名、女578名、計766名と伝えた。

1900年６月６日、シャムに仏陀の遺骨を受領するために赴く佛骨奉迎使（正使大谷光演、他に日置黙仙など）一行が到着し、中山嘉吉郎領事、本願寺開教使佐々木千重、曹洞宗僧侶釋種楳仙と在留邦人十余名が出迎えた。一行中病人が発生し、松尾旅館で静養することになった。ここから、釋種楳仙が一行に加わっている[25)]。

1901年10月9日の『読売新聞』は、一時帰国中の医師中野光三をインタビューし「南洋みやげ」を掲載した。中野は日本人の有望な分野として大工、洗濯屋、医師、売薬をあげた。

この年11月、後に大和商会を継承する長野實義がシンガポール初の農務省実業練習生になった[26)]。

1901年1月1日、世界無銭旅行家と称した中村直吉がシンガポールを訪問した。中村は世界一周を達成後、1908年に『五大洲探検記』全5巻を著し、シンガポールについては第2巻『亜細亜大陸横行』と第3巻『南洋印度奇観』で触れている。これらの著作の刊行は、訪問時から日時がだいぶ経っており、また共著者が当時の冒険作家押川春浪だったため、その内容については真偽を定めることは難しい。中村はシンガポールには、醜業婦が多く、その存在が日本帝国の体面を著しく汚していることや、領事館が開設した商品陳列館の商品が古い製品ばかりで、まるで「古物陳列所」であることから、シンガポールの名物は、「領事館員の空言壮語と淫売出稼」であると酷評した。中村のこの記述は、シンガポール日本人社会のイメージを大きく傷つけ、現地では不評だった[27)]。

1902年5月、本願寺から派遣されインドに向かう清水紫風が寄港した。出迎えたのは本願寺出張所（ビクトリア街）の佐々木千重だった。佐々木は布教の傍ら、朝は小学校の授業をし、夜は日本青年に英語を教えている。長男抱えた夫人も、日本の若い女性に裁縫を指導していた。佐々木は共済会の面倒を見ていた[28)]。

1902（明治35）年末には男115名、女573名の計728名になった。この年歯科医の山本作次郎が開院し、同年に到来した西村竹四郎は翌1903年に医院を開業している。

1903年、渋沢栄一の一行が欧米旅行の帰途、シンガポールに寄港した。領事の久水三郎は南アフリカに調査中で不在だったが、領事夫人と大須賀領事代理、三井物産支店長河村良平が一行を出迎えている。同行していた大田彪次郎は日本人社会の状況を次のように聞いた。

日本人の商店は同社（三井物産）を始め、三四戸在留の邦人は無慮千数百人ありといへ

ども、其生産一家を成し領事館が上流人士として夜会等に招待するものは、全体を通じて二十人を出でずと云ふ。余は紅袖羞を包み綺羅媚を売る八百の賤業婦、之に付随して衣食する走屍行肉のみ[29]。

1903〜4年に行われた外務省の「海外日本実業者の調査」は、シンガポールにあった有力商店として、三井物産、米谷商会（小川ツナ）、渋谷商店（渋谷由蔵）、大和商会（長野実義・水野初太郎）、日新商会（谷由輔・岡本林平）、米井商店（米井虎一郎）、矢ヶ部商店（矢ヶ部倉吉）、乙宗商店を挙げている[30]。

1904年、日露戦争が勃発した。日本人有志は、惣代冨木音吉、加藤鉦太郎、米井虎一郎、長野実義、中野光三、八木晄、矢ヶ部倉吉、二木多賀二郎、庄司文之助、広瀬良蔵が連名し、日本の大蔵大臣曽彌荒助宛に、軍資金として4062円50銭を献金した。外交史料館に残された領事の報告には3名のサラワク在住者などを含め、男114名、女293名の計407名の名前と住所、寄付額が記されている。最高額の100円を寄付したのは代表者たちで、女性の献金額は50銭から10円が多かったが、東境せいは50円を寄付している。献金者の大半は、「紅袖羞を包み綺羅媚を売る」と言われた女性たちだった[31]。

翌1905年4月、日露戦争に向かうバルチック艦隊がシンガポール沖を通過した。在留邦人は固唾をのんで大艦隊の威容を見送り、日本の前途に暗雲を見た。大和商会の長野実義は、図南生の名前でバルチック艦隊通過の様子を記事にして朝日新聞に送った。在留邦人は、同年5月に、二木ほか代表9名の呼びかけで再び1947円を献金している[32]。

6月、日本海海戦で日本の優勢が伝わると、在留日本人は、提灯行列を計画したが、警察署長から、「時節柄他の強国への手前もあり」と中止を求められ、許可されなかった[33]。

この年の末のシンガポールの在留邦人数は、男412名、女965名の計1377名だった。

このころ、シンガポールでは日本の女性を撮影した写真絵葉書が複数販売されていた。図3は、三井物産関係者が1904年に投函したものだが、この写真は、”The Underside of Malaysian History” の表紙にも使われている。写真は、シンガポールで有名なランバート社で撮影された[34]。

“Ah Ku and Karayukisan Prostitution in Singapore 1870-1940” には、表紙を初め数枚のからゆきさんの写真が掲載されている[35]。

同じころ、シンガポールで写真館を経営していた東郷社は、写真絵葉書の製作・販売を始めたが、印刷技術には難があった。（図4）

1908年1月22日の『東京朝日新聞』は、米国や豪州への移民は厳密なる手続きが必要な反面、シンガポールへの渡航は旅券が簡単におり、また無旅券でも入国できるため、移民を誘惑す

図3　シンガポールで発行された
からゆきさんの絵葉書　1904年の消印

図4　東郷社作成の Good Shepard 教会の絵葉書
1905年ころ

る悪漢が周旋料を詐取するケースが頻発していると、移民希望者に注意を促した。

シンガポールでは、1908年から職業別の在留邦人調査が行われた。最も人数が多かったのは娼妓の516名で、娼館が93軒あり、男は86名、女は93名が娼館経営に従事していた。珈琲店は5軒あり、男16名、女45名の計61名、雑貨商が16軒、男子が22名、女が11名の33名などで、男383名、女817名の計1200名の日本人が在住していた。

1909年5月、インド洋上で亡くなった二葉亭四迷の遺体が入港し、共済会付きの楳仙師を招いて会葬を行った。共済会からは二木多賀次郎、小山由松、森田常吉、田久島権七郎、西島安吉が参列した。

２．シンガポールの「からゆきさん」

1885年8月28日の『大阪朝日新聞』は、「千八百余万人の婦人諸君に望む」と題し、シンガポールまで進出している日本女性への覚醒を求め、88年4月26日付け同紙は、従来上海・香港止まりだった女性たちがシンガポールにまで範囲を広げていると警鐘を鳴らした。いずれも中川が領事館を開設する前の情報だった。東西交通の要所であったシンガポールを経由する人たちによってこうしたからゆきん情報は日本に伝わり、シンガポールは日本女性の集散地として国内でも話題にされることが多くなった。からゆきさんについては、Warren や清水により詳しく研究されている。

1901年5月20日、シンガポールで警察事情を調査した松井茂はシンガポールの女性たちの様子を以下のように報告した。

> 新嘉坡に於ては日本人の醜業婦は総て五百三十人余にして、其の他之に関して生活を営む者百人許りあり。故に日本人の総数七百人許りなるに対し醜業婦の多数なる真に驚くべきなり。
>
> 我邦の醜業婦は友仙縮緬等頗る人目を惹く衣類を着し、本邦婦人の如き大帯を纏はずして絹布類の兵児帯を以て之に代ゆ。故に一見以て醜業婦たるを覚知し得べし。（略）我邦の妓楼はバムダム街及マレー街（Bamdam Street and Malay Street）に在りて擔を連ね、夜に入りては、扮装せる娼妓軒下に在りて、来れ（Come）なる言葉を以て客を呼び、其醜状殆ど見るに堪へざるなり[36]。

東京帝国大学医科大学を卒業し、1902（明治35）年にシンガポールに赴いてそのまま医院を開業して同地に住み着いた西村竹四郎は、日本から「密航」してきた少女たちを多数見てきた。1903年の日記に、西村は少女たちが誘拐される手口を次のように記録している。

誘拐者（女衒）はまず甘い言葉で少女たちを誘う。そして、彼女たちを自分の妻や妹として戸籍を急造し、正規の船客として堂々とシンガポールに渡来させた。しかし、ごまかすことのできない場合には、非常手段に訴えた。

> 即ち船員と結託して炭艙、ボート、其の他人目に触れない場所に匿（かく）し、少量のパンと水を与え、日の目を見せずに密航するのだ。密航は全く命がけである。此の密航女は新娘（ニューガール）と呼ばれ、到着した土地には各地の楼主連が集まり、よい玉は千弗（ドル）、八百弗、安くとも三、四百弗と競（せ）りで売買される。馬の競りと同様である。

船員は誘拐者とグルで、少女たちは人目のつかない船蔵などに押し込まれ、密航させられた。そして到着したシンガポールで少女たちは「競り」にかけられ、売春宿へと売られていく。女性の容姿や年齢によって300ドルから1000ドルの値が女性ついた。

写真５・６　同じ日本女性モデルの絵葉書。
上はシンガポール、下はサイゴンで販売されている

買われた少女が、約束が違うといって客を取るのを拒むと、楼主（売春宿の主人）たちは偽の領事をしたてて、少女たちに会わせた。騙されてこの地に来たと哀訴する少女に向かって領事は、「お前の身の上は気の毒である。だが楼主はすでに六百ドルといふ大金を日本からお前を連れてきた男に旅費と衣服代として払っている」。それ故、金を払えばすべてが解決すると、同情を装いながら優しく諭す。

そんな大金は払えないと訴える少女に、「金が払えなければ、商売するより外に道はあるまい。かりに肉体は汚しても心の操を売らず。目をつぶって早く借金を返し、目出度く国許に帰って両親を安心させた方がよい」と、お説教を垂れる。偽領事の言葉が旅券も持たず、外国語も話せない少女たちの抵抗にとどめをさすのである[37]。

シンガポールでゴム園を経営した長田秋濤も死後に刊行された『図南録』（1917年）の中で次のように、少女誘拐の事情について触れた。

石川の浜の真砂のそれならなくに、如何にその筋の取締厳なればとて、本邦の婦女誘拐と密航は蓋（けだ）し絶ゆるの時あらざるべし。婦女を誘拐して海外に密航せしむる悪漢は、海外到る処脈を通じて謀計を凝らせり。而（しこう）して彼等の中には医者あり、歯医者あり、商館の主人あり、坊主あり、軍人あり、船員あり、口入屋あり。随って其の奇計妙策たる真に驚天動地底のものあり。奇想天外底のものあり。吃驚仰天（きっけいぎょうてん）唖然呆然（あぜんぼうぜん）として自失せざる能はざる底のものあり[38]。

この人身売買に関わった日本人は、いわゆる少女たちを誘拐して斡旋した女衒（ぜげん）だけではなかった。医者も、歯医者も、商店主も、僧侶も、軍人も、船員も、人材斡旋業者も、あらゆる職種の人間が海外のネットワークを利用し、同胞の女性を売り買いした。その手口たるやまさに驚くほど手が込んだものだったと、長田は言う。

その後、少女たちはそのままシンガポールで売春宿に沈むか、マレー半島や、スマトラ、ジャワ、セレベス（スラウェシ）など東南アジア各地に売り渡されるのである。

シンガポールのからゆきさんについては、多くの寄港者により揶揄されながら記述がなされている。そんな中、青少年向けの立志小説にからゆきさんが登場する。1907年に小河内五橋が出版した『殖民王』である。二人の青年がアフリカでの成功を志し、途中シンガポールに寄港する。二人に声をかけたのが長崎県出身の若い女性で、ピンプに騙されシンガポールで苦界に沈んでいて、二人が日本に帰るのなら連れて行ってくれと懇願する。

憐れなる彼女等の多くは、悪むべき姦商に

欺かれて荷物の中に押し込められ船中に投げ入れられるので、長い航海中は船底の炭庫に押込まれ、危くも上陸するのはまだしも、炭庫の暗黒中に窒息して、再び娑婆の光に浴し得ぬ不幸な処女あることを聞いては、悲惨も亦甚だしいのである。

国辱的存在の醜業婦だと思っていた二人の青年は、その実情を知り彼女たちの運命に同情したが、野望のある二人にはどうすることもできなかった[39]。

1907年、島原大師堂の広田言証がシンガポールを来訪し、矢ヶ部倉吉の世話になりながら、日本人墓地で施餓鬼を行った[40]。その時の写真はシンガポール日本人会の『戦前日本人の日本人社会』に掲載されている。言証が帰国後建設した大師堂の天如塔を取り囲む玉垣には、シンガポールからの寄進者として、二木多賀二郎、東境せいたちの名前が刻まれ、仏間には東境が言証に贈った東南アジアの地図が掲げられている。

３．1910年、「紛憂」の日本人社会

図７　晩年の西村竹四郎
（『在南三十五年』）

在留邦人の草分け的存在の一人である西村竹四郎（點南）はまめな人で日記を残していた。西村は、シンガポールで1930年代に刊行されていた雑誌『南洋時代』にその日記の抄録を連載し、1936年に編年体にまとめた『在南三十五年』を出版している。同書は、初期のシンガポールの日本人社会の状況を知るうえで不可欠な資料となっている[41]。

その西村は、日本人会の結成をめぐる、1910（明治43）年のシンガポールの日本人社会の混乱ぶりを記録している。

此の年は在留民一般にとり多忙多難な年であった。在留民史上曾つて見ない紛憂を醸し、同黨異閥、排擠に鎬を削るさまは、宛然、在留民戦国時代の年であった。

その戦国時代の年、1910年におけるシンガポールの在留日本人は男579名、女636名の計1,215名だった。これは領事館に届け出のあった人数のみで実数はもう少し多かったようである。

在留邦人の職業別上位（10名以上）の内訳は表の通りだが、人数には家族も含まれている。

1908年末の調査では数字に表れていなかったゴム栽培に従事する男が男全体の半分近くを占めている。日本人がマレー地域でゴムの栽培事業に手を染めたのは、1902年の笠田直吉と中川菊三を嚆矢とし、その後東境せい、中野光三、蔦田顕理もゴム園を買収し、1909年にはシンガポールの対岸のマレー半島のジョホールで三五公司が進出した。1910年にはジョホールで松方幸次郎、南洋護謨、三井同族、大倉信太郎などが事業を開始した。護謨景気にあやかろうと在留邦人も、福田太一、二木多賀次郎、遠藤隆夫、長野実義、加藤鉦太郎、小山芳松、矢ヶ部倉吉などが手を染めている。娼館経営を妻に任せて、方向転換した男たちもいた。護謨栽培事業の拡大に伴って、日本から新たなエリート層の到来とゴム園労働者の増加により、男の人数は3年前の383名から579名と急増している。

女の大半は娼妓、娼館経営者か、外国人の雇われの身になっていた。娼館経営者は全て女性で、娼家の戸数80と人数73名は合わないが、これは複数の店を経営していたものがいたのだろう。5年前の1905年と比較して在留女性は

表
1910年（明治42）年末のシンガポールの職業別在留邦人

職業別	戸数	男人	女人	計人
娼妓			353	353
護謨栽培業	35	250	15	265
娼家	80		73	73
外国人被雇人			52	52
飲食店	12	23	11	34
理髪業	8	24	9	33
下宿業	9	15	14	29
医師	4	20	8	28
売薬業	6	23	2	25
宿屋業	4	16	9	25
歯科医	5	14	8	22
食料品雑貨商	5	16	5	21
仲次業	2	14	7	21
洗濯業	4	14	4	18
呉服行商	6	12	3	15
官吏（使用人等を含む）	3	10	4	14
写真業	3	7	6	13
新聞業	2	10	3	13
その他		111	50	161
合計		579	636	1,215

外務省外交史料館史料

329名減少し、08年に娼館経営に携わっていた86名の男たちは、表舞台からは表面上消えた。

他の職業には、酒類販売、煙火、売薬行商、大工、鼈甲細工、菓子、染物洗張、珈琲店射的、遊芸及び興業、氷店、按摩、裁縫、三味線張替などがあった。

三井物産以外の商店は、ほとんどが小資本に分類される店で、影響力のあるのは娼館関係者だった。

このころの日本商店については、後述する1911年に刊行された『南洋便覧』や『南洋画報』に主な商店の写真が掲載されている。そこには、三井物産（林徳太郎　図8、9）を初め、乙宗商会（支配人海津幸一郎　図10）、大和商会（長野実義、1898年創業）日本売薬（支店長山崎茂樹、1907年支店開設　図11）、長井商店（長井禎吉、1908年ころ創業　図12）、矢ヶ部商会（矢ヶ部倉吉　図13）、中川商店（中川菊三、1898年ころ創業　図14）、小山芳松商店、田本商店（田尻才六、1908年創業　図15）小山新商店（小山新之助）、長久貿易商会（佐藤範次郎）、日本大葯房（遠藤隆夫）、丸十呉服店（石井亥之助　図16）、越後屋（高橋忠平、1908年創業　図17）、庄司商店（庄司文之助、1902年創業）、日本商行（城野三次郎　図18）、小山芳松商店（小松芳松、1901年創業　図19）、坂田商店（坂田政次郎）、村上商店（村上浅次郎、1910年創業）、福屋（福田太一、1906年創業）、二木商店（二木多賀二郎）などがあった。

医院としては、日本神農医院（中野光三、1894年開院　図20）、西村医院（西村竹四郎、1903年開院）、日英医院（歯科医蔦田顕理、医師大貫公光）、養生園及び日英大医館（医師：彦坂、大貫）があり、歯科医としては山本歯科医院（山本作次郎、1902年開院　図21）、今岡歯科医院（今岡豊三）があった。

写真館は、東郷社（満井善吉）、東洋写真館（近藤）があり、ホテル・旅館は、碩田館（得丸亀次郎　図22）、播磨旅館（播磨シオ子　図23）、ネービーホテル（遠藤隆夫）、高山旅館（高山清七）都ホテル（山田貞治郎、1903年創業　図24）があった。活動写真館の播磨ホール（活動写真、播磨勝太郎）は第3ホールまで所有しいていた。ほかには、北見理髪店（北見音吉）、副島時計店（副島辰五郎、1907年創業）、大野洋食店（大野義隆　図25）などが商売をしていた。

1910年末に行われた外務省の「海外日本実業者の調査」では、三井物産、乙宗商店、大和商会、日新商会、日本商行、日本売薬、長井禎商店、小山商店、中川商店、福屋、庄司商店、矢ヶ部商店、二木商店、播磨ホールの名前が挙がっている。

1911年刊行の『南洋画報』に掲載されたシンガポールの日本商店やホテル

図8

図9

図10

図11

図12

図13

図14

図15

図16

図17

図18

図19

図20

図21

図22

図23

図24

図25

4．日本語新聞の誕生

1910年の邦人調査によれば、シンガポールには日本語新聞を発行する社が2社あった。

この2社が日本語新聞を発行する前に、大阪朝日新聞西村天囚の甥西村司馬が朝日新聞の通信員の肩書で明治34、5年ころ渡来し、その後、鈴木與一が経営していた旅館南洋館から謄写版刷りの新聞を発行した[42)]。しかし、西村竹四郎は見たことがないと、この説を否定していて真相は不明である[43)]。なおこのころから、先に述べたように大和商会の長野実義が朝日新聞の通信員を務めていた。

シンガポールで邦字新聞がはじめて発行されたのは、福田天心（宇太郎）が1908（明治41年）7月1日に刊行した『南洋新報』で、続いて同年10月18日に伊藤友治郎（香夢）が始めた謄写版刷りの『星（新）嘉坡日報』であることが通説になっている[44)]。

これは、西村の『在南三十五年』が出典になっていて、多くの文献がこれに依拠しているが、正しくない。

伊藤が『星嘉坡日報』を創刊したのは、1909（明治42）年10月18日である[45)]。創刊年の間違いは、伊藤が雑誌『南洋時代』に香夢園主人の別名で書いた「赤道直下における日本人雄張の跡」に1908年と記したものを、そのまま西村が踏襲したことにより発生した[46)]。

図26　福田天心（右から２人目）と南洋新報社（『南洋画報』）

伊藤の上記小文には、『星嘉坡日報』創刊の「二、三ヶ月前福田天心氏に依りて発行された南洋新報といふのがあった」と、ある。西村が伊藤の勘違いに引きずられて、こちらも創刊年を1908年としてしまったと理解する方が妥当であろう。両紙とも1909年の創刊である[47]。

南洋で日本人の集散地だったシンガポールでは、両紙を嚆矢として、日本語による新聞や雑誌が生まれては消え、消えては生まれた。

しかしながら、この時代の新聞の原紙は現存するものはほとんどなく、オリジナルに接することは困難である。

シンガポールの初期の日本語新聞について記録を残しているのは、西村竹四郎のほかに伊藤浪韻がいた。伊藤は西村竹四郎が「在南三十五年」をシンガポールで刊行された雑誌『南洋時代』に連載したのと同様に、「新聞紙」と題したシンガポール日本人社会史を20回にわたり掲載している。

『南洋時代』は、1930年6月にシンガポールで南洋時代社を創設した辻森民三が、月二回発行した雑誌だった。

一時期、この『南洋時代』の編集主幹だった伊藤浪韻は、本名を伊藤知千代と言い、歯科医師の傍ら『南洋自由評林』を刊行した山本作次郎のもとにあった『南洋自由評林』と、わずかに残されていた『南洋新報』と『星嘉坡日報』を基にして当時の日本人社会を描いている[48]。伊藤は、山本にインタビューしつつ「新聞紙」を執筆し、折に触れて西村竹四郎らが事実関係を正している。

伊藤知千代は、1909年8月8日に、3歳で母スミヨとともに来訪後、1912年5月に神戸に帰着するまでシンガポールに滞在したことがある。スミヨは大逆事件に関与したとして要視察人乙号に、養父伊藤友治郎（香夢）も社会主義者として甲号に編入されていた当時の危険人物であった。この養父友治郎が『星嘉坡日報』を創刊した人物だった。「新聞紙」からは親子の関係は窺えないが、その内容は、自ずと『星嘉坡日報』側に立って論じている。

５．日本語新聞が伝える幻の日本人会

1909年7月1日に創刊された福田天心の南洋新報社は、当初社屋をセラングーン街167に置き[49]、しばらくしてヴィクトリア街377-1に移転している[50]。週二回（水、土）発行の謄写版刷りで、1910年1月3日から活字版になった。山本作次郎の手元にあった『南洋新報』は、1910年8月29日付けの第69号と1913年8月19日付けの407号だった。

一方、伊藤友治郎はヴィクトリア街352番地に南洋通信社を創立し、1909年10月18日に『星（新）嘉坡日報』を創刊した[51]。山本宅にあったのは、1910年12月1日付けの『夕刊星嘉坡日報』331号で、呉服卸商の丸十の広告がトップだった。鉄筆による夕刊紙だったが、伊藤の一時帰国などで、休刊することが多かった。311号によれば、『日報』は、支局をペナンとクアラルンプールに置いている。

両紙は日本人社会のあり方を巡って泥仕合を続けるが、更に1910年5月1日、歯科医師の山本作次郎が石版刷りの週刊『南洋自由評林』を創刊した。すべて手書きでかなを付し、全2面だけのビラのような新聞だったが、3号から菊版4頁になった。

西村竹四郎によれば、1910年に織田登という「羽織ゴロ」が、「醜業撲滅」を謳った謄写版刷りの雑誌を2、3回出している。織田は娼館関係者の反感を買い、矢ヶ部倉吉などの博徒と大立ち回りを演じたという[52]。

織田登は、「容貌端麗美髯を著え痩身の偉丈夫、既に孫逸仙と交友」した人物で、1908年にボルネオで革命運動を起こそうとして発覚し、蘭印政府から指名手配を受け、シンガポールに追われた。シンガポールでは、政府か

ら禁止されている賭博の元締めをやっていた神戸新、二木、矢ケ部などの娼館経営者に、軍資金を出さなければ密告すると脅した。その結果、博徒が織田たちを襲ったものだ。その後、織田はシャムの王様に金屏風を贈るため背負って山越えを試みたが、途中で亡くなったという[53]。

1909（明治42）年5月、古参医師中野光三や、シンガポールで専門学校を卒業した田本商店主田尻才六が主導して、日本人青年会が結成された。青年会設立の目的は、シンガポールに横行する誘拐・密航師や博徒、無頼漢に対抗するために、在留青年たちに英語と柔道を身につけさせることだった。その一方、新参の青年には高圧的な態度で臨んだという。会長は三井物産の林徳太郎、副会長は中野光三、幹部に三井の笠原寛美、乙宗の海津幸一郎、田尻才六がいた。林は日本人でただ一人のシンガポールクラブの会員という超エリートだった[54]。

1909年7月1日、福田天心の『南洋新報』が産声をあげ、9月にはフランス文学者の長田秋濤（忠一）が大倉信太郎のジョホールの護謨園を経営するために、シンガポールに到着した。

清国長春で『長春新報』、韓国清津で『咸北日報』を刊行し、いずれの地でも在留禁止命令を受けて退去させられた伊藤友治郎がシンガポールに10月に到着し、18日に『星嘉坡日報』を創刊した。

シンガポールで活動を始めた長田は同志を募り、林率いる青年会を日本人会に移行するように主張した。鈴木栄作領事をはじめ、長野實義（大和商店）、山本作次郎（歯科医）、福田太一（福屋）、高橋忠平（越後屋）、伊藤友治郎（星嘉坡日報）などが同調した。賛成したのは娼館関係者とは距離を置くか、近年渡南して開業した人たちが主だった。

一方、1937年に出版された『シンガポールを中心に同胞活躍　南洋の五十年』は、異なった見解を取っている。青年会の結成当時、鈴木領事をはじめ領事館員はその結成に尽力したという。長田秋勝（濤の誤り）の来星に伴って日本人会は結成されたが、政庁から許可を得られず、その上、200ドル余の積立金をメチャメチャに費消されたので、青年会創立者たちは憤慨したという。そして両派と新聞との関係を次のように述べる。

> 一度青年会を攪乱せんとして失敗した秋勝（濤）氏等は、さらに南洋新報及び自由評林紙上に在留同胞を罵倒して休まず、血気の連中亦黙視するに忍びずと、会報紙上に痛烈な反駁分を掲げ、伊藤友次郎氏の新嘉坡日報にも駁文を掲載する等切に論争に花を咲かせた[55]。

この文章では、長田派の日本人会が『南洋新報』、『自由評林』をよりどころにし、『星嘉坡日報』が青年会を支持したことになっているが、事実は異なっている。長田派（日本人会派）を徹底的に支持したのは伊藤友治郎（香夢）の『星嘉坡日報』であり、三井、中野派（青年会派）のよりどころになったのが福田天心の『南洋新報』だった。この両紙が、お互いを変心（天心）、臭夢（香夢）とけなしあい、罵詈雑言を用いて非難し合ったのである。遅れて登場した週刊新聞の『自由評林』は、その支援に変節した期間

図27　竹越與三郎と三井物産社員（『南国記』）

はあるものの、基本的には長田グループを支持していた。

この年、ジャーナリストの竹越與三郎（三叉）が、東南アジア諸国を訪問し、シンガポールでは三井物産が世話をした。（図27）翌年出版された『南国記』は大ベストセラーになり、南洋ブームの走りとなった[56)]。

1910年1月、伊藤友治郎は先に呼び寄せた古江ミスヨと入籍した。

1910年5月1日、山本歯科治療本医院の山本作次郎（ヴィクトリア街51号）が週刊新聞『自由評林』を創刊した。まさに、『南洋新報』と『星嘉坡日報』の対立が激化していた時期で、両者の戦いの火に油を注ぐような登場だった。

10年5月8日、ハリマホールで開催された青年会では、青年会から日本人会への移行が議案だった。日本人なら誰でも出席できたが、午後1時の開会は3時にずれ込んだ。林会長の開会の辞に続き、中野副会長が会計報告や伏見宮や軍艦生駒の歓迎の顛末を報告し、その後多数会員の賛成を以て日本人会への移行が可決され、ここに日本人会は形式上成立した。会長は長田忠一（秋濤）、副会長は中野光三と長野実義が選ばれた。会場となったハリマホールは、播磨勝太郎が経営する映画館で、ビーチロードに面していた。（図28）

5月9日、長田は朝日新聞に向けて、日本人会会長就任にしたことを発信し、5月29日に記事は掲載された。

図28　ハリマホールと播磨勝太郎（『南洋画報』）

南洋の発展と共に日本国民団結の必要は刻一刻と増加し、在来の日本青年会拡張せられ、海峡植民地及び馬来半島全部に亘る日本人会組織せられ、児童教育、青年誘導等の事業を経営することと相成り、小生総会の選挙に依り止むを不得、会頭の椅子に就き申し候。恰も日本村村長に御座候。夫れにしても南洋の天富は是非に本邦諸彦の注意を煩わしたきものに有之候。

6．日本人会派と青年会派の対立

シンガポールには、日本海軍の軍艦や練習艦、それに著名人の寄港が多く、在留邦人は親身になって来訪者の世話をした。中心になったのは広壮な社宅を有していた三井物産で、歓迎園遊会などを開催している。（図29）

この練習艦隊の接待も在留邦人の寄付で賄わ

図29　三井社宅で開催された園遊会の絵葉書
明治39年7月5日の日付

図30　新嘉坡日本人会作成の
練習艦歓迎スタンプのある絵葉書（明治43年5月）

れた。『自由評林』第9号は、5月27日に入港した練習艦隊阿蘇・宗谷の歓迎に、三井物産が200ドル、鈴木領事100ドル、大和商会が100ドル、乙宗商会店員50ドル、長田秋濤20ドル、西村竹四郎、日本売薬、中野光三、伊藤香夢（友治郎）各10ドル、高橋忠平8ドル、福田太一、山本作次郎5ドル、田尻才六1ドルが寄付されたが、福田天心からはなかった、と書いた。日本人会派は、領事、大和、長田などの名前が並び、青年会派は三井物産を除き、田尻の1ドルだけだった。鈴木領事は金払いがきれいな外交官で、後任の領事は常に鈴木と比較されている。

軍艦や練習艦の来訪は、在留邦人を元気づけた。日本人会派は、「練習艦隊歓迎紀念　新嘉坡日本人会　明治四十三（1910）年五月」のスタンプを押した絵葉書を乗組員に配布し、在留邦人三十余名はアットホームに招待し、鈴木領事は二度も食事に招いている[57]。（図30）

一方、青年会は、長田やその支持派を非難する記事を載せた「青年会終刊号」を伊佐治練習艦隊司令官に寄贈した。これが紛糾に輪をかけた。山本作次郎のもとに残る『新嘉坡日報』（1910年6月3日、162号）は、日本人会評議員会の模様を伝えている。

昨夜の評議員会、昨夜8時40分より元青年会事務所に於て開かれたる日本人会評議員会の報告及び決議事項左の如し。

一．練習艦隊歓迎及び物品の寄贈を受けざりし理由の報告

二．同艦隊歓迎に対する費用の残余は各自主筋者に割り戻すこと

三．青年会会報終刊号発行には其の責任を明らかにすること

四．青年会会報終刊号を練習艦隊に寄贈したるは中野光三氏の指図に依ること

青年会会報終刊号の内容は不詳だが、日本人会派を強烈に誹謗する内容だったのだろう。この会報の責任者である北元は、青年会終刊号には責任者がおらず、投書箱に来たものを漫然と掲載したもので、掲載文は会の意図するものではないと弁解した。

『南洋自由評林』は、一貫して日本人会派を支持してきたが、この問題については青年会派を擁護し、中野光三や反対派の竹内芙蓉の意見を掲載した。この件を契機に、中野は日本人会を脱退し、田尻などが続いた。これが山本の変節と言われた事件だったが、後にその真相を山本は伊藤浪韻に次のように語っている。

青年会派を支持する新聞は『南洋新報』一紙であったため、竹内が新たな新聞の創刊を計画し、既に印刷機械も購入していた。これが創刊されれば穏健派の蔦田歯科医や西村医師など渦中でない人々まで迷惑を被る可能性があった。そのため、山本は中野と竹内の意見を一回だけ掲載し、ガス抜きをした。伊藤友治郎とは打ち合わせ済みだったという。

6月、評判の良かった鈴木領事が帰任し、近藤愿吉副領事が着任した。

1910年7月2日の日本人会評議員会では、学齢児童教育問題が取り上げられ、学務委員として、岩橋、西村竹四郎（医師）、蔦田顕理（歯科医）の三名が決定し、基金の募集と学校の早期開校が決議された。日本墓地に次いで、日本人社会で課題だったのは子供の教育問題だった。とりわけ蔦田はアングロチャイニーズスクールの卒業者であり、最も熱心に学校問題に取り組んだ。

在留外国人団体の結成にはシンガポール政庁の認可が必要だった。ところが、日本人会には許可がなかなか下りなかった。日本人会派は、青年会派が「長田秋濤は社会主義者」だと、関係者に吹き込んだのが、許可が下りない理由だと主張した。

7月20日に開催された日本人会評議員会には、近藤副領事をはじめ16名の幹部が出席し

た。開口一番、副領事は「日本人会のエキゼンプト（免税）は見込みなきが如し」、と報告した。近藤は日本人会名誉会頭に就いていたが、エキゼンプトされない会に名誉会頭としてとどまるわけにはいかず、日本人会は解散して他日立派な日本人会を結成すべきであると、述べた。これに対してほとんどの評議員から、何の対策も取らず、一度だけの申請が断られたからと言って解散とは大早計だ、と反論があり、エキゼンプト・レジスター問題は紛糾した。結局この日は、結論が出ず問題は先送りとなった。傍聴席には退会したはずの中野前副会長と竹内、それに『南洋新報』の若田記者がいた。

『南洋自由評林』は「近藤君、熱病でもやって居るのか、どうもする事、なす事、不評判だから、自愛頼む」と、近藤の青年会派よりの発言を強烈に批判した。(13号)

8月25日、近藤副領事の公邸で、一部の在留邦人を集めて「アットホーム」が開催された。会の目的は、日本人会の在り方と学童問題を協議することだった。この会に新聞社からは『南洋新報』の福田天心だけが招かれた。その理由を『南洋新報』8月27日付69号は副領事の言葉として、「他二紙は甚だ没常識なるを言明し、公明なる記者としての資格を否認せり」と、そのまま掲載した。この一文が、伊藤と山本の怒りに油を注いだ。

山本は一日に三度も四度も号外を出して、近藤の発言をとりあげた。「見よ憲法」をと、大日本憲法の条文を持ち出し、近藤を徹底的にたたいた。『新嘉坡日報』も同様に近藤や『南洋新報』を追求した。あまりに領事がやられるので、城野三次郎や福田太一、蔦田顕理がかばったが、彼らも逆に標的にされた。高橋忠平や矢ヶ部倉吉が間に入って『南洋新報』との仲を取り持とうとしたが、『南洋新報』もこれを受け入れなかった。

8月29日付けの『南洋自由評林』は、「近藤領事は学童問題を名として去る25日領事館に在留民の十数人を招きたる其の席上に於て、(星嘉坡）日報及び我社を侮辱したる其件に付、両社は言論界の恥辱として三人の弁護士に托し其の筋に訴訟を提起する事に運びたり」と報じた。ついに近藤副領事を訴えたのである。

この醜い論争を一時休止にさせたのが、1910年8月11日に関東地方を襲った台風による大水害だった。死者・行方不明者1300名を超える大災害に、二木多賀次郎は矢ヶ部倉吉、高橋忠吉と協議し、水難義捐金の募金活動を開始した。発起人、世話人は他に、小林千代吉、福田太一、土谷仙太郎、香川助人、大野義隆、岩永亀松、播磨勝太郎、伊藤友治郎、松尾常造、小山芳松、加藤鉦太郎、山本作次郎、福田宇太郎だった。(20号)

『南洋新報』、『星嘉坡日報』、『自由評林』の三紙は、号外を無料で配布し、共催で義捐金を募った結果、1770円87銭が集まった。

もっとも多額の寄付をしたのは二木多賀二郎で57円42銭5厘だった。現地通貨を日本円に換算しているので端数が出ている。2番目は45円70銭の園山ハツ、次いで34円27銭5厘の林徳太郎、乙宗商会店員一同、播磨勝太郎、矢ヶ部倉吉、28円56銭2厘5毛の古賀兵太郎だった。中野光三、遠藤隆夫、加藤鉦太郎、小林千代吉、小山芳松、などが22円85銭で続いた。日露戦争の際に、女性で一番高額の寄付をした東境セイは、保坂槇子、中村マサとともに22円85銭だった。

二木は、義捐金のみならず、救恤品も募集した。女性で最も高額の義捐金を寄付した園山ハツと中村マサ、香月ヨシエの3名が二木を補佐し、古着の募集は伊崎イス、小林ヨカ、森田タカ、山下フヂ、吉次カネ、近藤スジの女性6名が当たった。浴衣、襦袢、洋服、帯、小物などが花街の女性から届けられた。マレー半島ペラックからは110名により1057円42銭、タイピンの

20名からは58円52銭、ボルネオのポンティアナックからも585円49銭が寄せられた。『南洋自由評林』は寄付者すべての名前を掲載している。(24号)

義捐金活動が終息すると、再び山本は近藤を攻撃した。近藤のゴシップ問題である。単身赴任だった近藤は、花街に繰り出していたらしい。

10月、『新嘉坡日報』の伊藤友治郎は、大和商会長野実義の世話で雑貨店を開店した。新聞の購読料や広告費だけでは経営が苦しかった。

10月、軍艦生駒がシンガポールに寄港し、志賀重昂、鈴木天眼、大庭柯公など著名なジャーナリストが下船した。記者団は長田秋濤やネービーホテル主遠藤隆夫の案内で各地を回った。『星嘉坡日報』と『南洋新報』は訪問客にゴム事業の有望さを説いている。図31は、生駒艦歓迎のスタンプを押した絵葉書だが、これには日本人会の名前は記されていない。

シンガポール日本人社会の一大行事は、天皇誕生日である天長節だった。在留邦人の関心は、この天長節に合わせて開かれる夜会に、攻撃を続ける山本を副領事が呼ぶかどうかだった。近藤は山本に態度を改めさせようと電話を掛け領事館に来るように伝えた。しかし、「小役人の分際で小生意気だ、用があるなら正式な書状で」と一括され、文書で以て山本を招いた。

11月1日、領事館を訪れた山本に、近藤は「新聞を廃めなければ天長節の夜会には招かれぬ」

図31　軍艦生駒歓迎（1910年10月12日）のスタンプが押された絵葉書

と言い放った。加えて「君は恐ろしい人だ。狂気だと皆の人が吾輩に話すよ」と付け加えた。結局話は平行線に終わり、山本は天長節に招かれなかったようだ。山本は近藤との会話を『南洋自由評林』にすべて掲載した。

11月16日、日本国内で伊藤友治郎の妻ミスヨの名前が、大逆事件で逮捕された大石誠之助の押収文書の中で発見された。これを受け、外務大臣から近藤副領事宛に伊藤の状況を調査するように指示が出た。国内でも伊藤の身辺調査が行われ、出身地の長野県知事は伊藤が前科12犯であると報告した。

10月19日付け『新嘉坡日報』第177号が、12月16日に日本国内で販売禁止になった。シンガポールの各紙は日本にも送付していたようだ。

12月20日、近藤副領事は。シンガポールに於いても伊藤の言動は社会主義的で、根拠のない風説を流していることなどを報告した。

12月末、近藤は着任6か月という短い期間にもかかわらず、サンフランシスコへの移動が決まり、岩崎譲吉が副領事として着任した。

近藤の転任が官報に掲載される一週間前に、山本は突然『南洋自由評林』を廃刊した。そして、社告として「当新嘉坡副領事近藤愿吉氏に係る一切の記事を取り消す」とし、二木多賀次、播磨勝太郎、小林千代吉、矢ヶ部倉吉の厚意なる斡旋に基づいた廃刊であることを述べている。二木たちは、山本が近藤を「馬鹿野郎」、「ゴマスリ野郎」、「ノラ豚」、「没常識」などと侮辱したため、近藤が帰国を前に権力を笠に着て、新聞をつぶすのではないかと心配して、廃刊を進言したようだ。

近藤は翌1911年1月8日に在留邦人によって開催された歓送会を最後に、シンガポールを去った。

西村竹四郎は、『在南三十五年』の明治43（1910）年の項で、「在留民史上かつて見ない醜い紛憂を醸し」と述べ、長田秋濤を中心に旧

来の弊風を一掃しようとする革新派と、現状維持派との間で在留民が感情的に二分したことを記している。

革新派は伊藤香夢の星嘉坡日報に拠り、旧日本人会長長田氏及び長野派を支持し、守旧派は福田天心の南洋新報の下に旧青年会三井（物産）、中野（光三）派を擁護した。
（略）
そこへ新たに山本作次郎氏の自由評林が飛び込み、始め旧日本人会に黨し後に旧青年会に與し罵詈雑言、毒舌醜極の筆を弄し、暗闘乱撃の混戦に陥った。形容を誇大にすると白昼魅魑魍魎横行し、夜鬼哭啾々たりで、実際心ある人は大いに憂へ且つ悲しんだ。

長田や長野と親交のあった西村にとってもこの対立は他人事ではなく、西村は伊藤の『星嘉坡日報』派と見られていた。

７．シンガポールの人気投票

1911（明治44）年2月2日、近藤副領事の進言に基づき、政府は伊藤友治郎を要視察人甲号269に、妻ミスヨは779号に編入した。要視察人とは政府が危険人物と認定し、国内にあっては常に監視の対象になり尾行がついた。シンガポールでも伊藤の行動を新任の岩谷副領事は逐次東京に報告している。

1911（明治44）年4月18日、澁谷政雄が、南洋各都市の紹介と日本商店の写真を掲載した折りたたみパンフレット『南洋便覧』（発行：シンガポール、印刷：東京、販売：矢ヶ部商会）を刊行した[58]。筆者の所有するものは、表紙奥付がない『馬来半島案内』だが、この一枚紙の片面は馬来半島の地図と邦人商店等の広告で埋め尽くされた[59]。掲載された予告には、『便覧』制作にあたり橋本天涯が情報収集の任にあたったが、病気で死亡したため、編纂部が跡を継いだ、と記されている。緒言には明治43年7月の日付があり、伊藤図南の『南洋の大富源』を併読するとよいとアドバイスしている。

橋本天涯や渋谷政雄については不詳だが、発売所の矢ヶ部商会は、醜業撲滅の件で織田とケンカした「博徒」矢ヶ部倉吉の店だった[60]。

4月25日、岩谷領事代理は、伊藤友治郎を「平素過激の言論を弄し、愚民を扇動するの事実有之。同人発行星嘉坡日報記事中往々政府を誹謗するの文句あるは曩に送付の通りにして、尤も当地に於ては先頃来同人は居領民に全く信用を失墜致し居るに付き、別に其言論に耳を傾くるモノは無之且つ資財蕩尽困厄の状態」であると、報告した。

伊藤の筆は、過去に満州と朝鮮で2回新聞を発行していた経験がものを言った。岩谷や青年会派を相当に刺激したのだろう。岩谷は伊藤の信用度の低いことを強調し、新聞の売れ行きも悪く困窮状態にあると述べている。事実、伊藤の妻ミスヨは、雑貨店を経営するとともに裁縫業も開始して伊藤を助けている。ライバルの福田天心は、裏で妻に「女郎屋」を経営させ、『南洋新報』の営業資金にしているという噂だった。

岩谷副領事は、伊藤の信用はシンガポールの在留邦人の間では、失墜していると言っているがはたしてどうだったのか。

山本の『南洋自由評林』は、「青年の愛する人物投票」と題して、シンガポール在留邦人の人気投票を14回行った。第一回目（第9号）の最高得点は、林徳太郎と長野実義（11票）、以下長田忠一（秋濤）、田尻才六、二木多賀次郎、海津幸一郎、笠原寛美、竹内芙蓉、加藤尚三（9票）と続いた。三井物産と大和商会がトップなのが面白い。笠原も三井である。

投票は回を増すごとに増え、最終回では林がトップをキープして138票、長野と中野光三が（128票）、長田、伊藤友治郎（118票）、田尻、播磨勝太郎（117票）、山崎茂樹（116票）、二

木、小山芳松、矢ヶ部倉吉（115票）、佐藤勇太（114票）と、ほとんど同じような票で、上記人数を加えて90票以上の得票者が41名もいた。ちなみに釋種楳仙（僧）は103票、西村竹四郎は102票だった。『新嘉坡日報』の伊藤は118票を得ているが、山本と『南洋新報』の福田天心、近藤副領事は90票以上のリストに含まれていない。

同様に日本婦人会長は誰が適任かという投票を数回行った。最終回（第25号）の高得票者は、林（129票）、長田（124票）、笠原（117票）、中野（113票）、山崎（109票）、長野（108票）の各夫人で、副会長適任者としては、笠原（103票）、中野（101票）、長田、長野、蔦田、田尻（94票）だった。これが選挙に反映されれば、正副婦人会長は三井物産の林夫人と笠原婦人が独占することになる。

こうした人気投票は、新聞購買促進効果をもたらしたのだろう。公正な投票とはとても思えないが、上位にあげられた人たちは、青年会派、日本人派を問わず、有力者であったことは間違いない。伊藤もそこそこ人気があった。しかし、とりあげられた人々にとってもとりあげられない人にとっても、迷惑な話だったに違いない。

このころ、シンガポールでは満州秋田潔が、厳正中立を謳った「新嘉坡サンデー」を発刊した。1911年に南洋諸国を歴訪した塩見平之助はシンガポールの日本語新聞事情を次のように伝えた。

> 南洋の日本人が新聞を要すること勿論なるも、人口の至少なるは、新聞事業経営者の最も困難とする所。去れど、読者は鉄筆謄写版の文字を以て満足するが故に、新聞雑誌の創設は甚だ易し。新嘉坡は斯かる事業の醞醸所にて、南洋新報（一週二回発行、活字及印刷機を有す）星嘉坡日報（日刊鉄筆）星坡サンデー（週刊鉄筆）の三発行物あり。其発行数は五十枚なるあり、二百枚なるあり、最も多き南洋新報は五百枚ならん[61]。

南洋新報は発行部数500、星嘉坡日報は200部、そして星坡サンデーが50部だったのだろう。『星坡サンデー』は、『シンガポールを中心に同胞の活躍　南洋の五十年』にも、初期の新聞として名前が挙がっている[62]。どちらかと言えば、『新嘉坡日報』に近い立場だったようだ。

5月から7月まで、伊藤友治郎は日本に帰国したが、要視察人が故に常に監視が付きまとった。『富の南洋』という雑誌を500部印刷したものの、国内での販売は許可されずシンガポールで販売したというが、筆者は未見である。

6月、植物学者の川上滝彌がシンガポールを訪れ、「邦文新聞あり。南洋新報と云ふ。福田天心氏の経営に係り、規模小なりと雖も南洋唯一の邦文新聞にして居住邦人の慰安を受くるもの少からざるべし」、と記した[63]。伊藤は帰国中だった。

8月10日、日露戦争で名を馳せた東郷平八郎と乃木希典両大将を伴って東伏見宮が来訪し、中野光三が青年会を代表して宮に邦人状況を進講した。日本人会長を名乗っていた長田秋濤も拝謁を希望したが、「日露戦役に於て露探の嫌疑を被った」ことなどの理由でかなわなかった。中野は長田とそりが合わなかったが、「思ひ出して顰蹙に堪えないのは、当時長田秋濤なる者あり」と、20年近くたった後でも次のように回想している。

> 卑屈にして、陋劣なる長田秋濤は、之（拝謁がかなわなかったこと）を吾々青年会の仕業と誤解し、其後青年会撹乱の目的で日本人会を設立してみたが、全量分子の賛成を得る事が出来ないので梅雨の如く消えて了った[64]。

東伏見宮との面会は、日本人会設立騒動の後に起こったことなので、中野の記憶は不確かだが、長田に対する怨念は時を越えても忘れられなかった。

長田秋濤は、『椿姫』など多数の翻訳・著作があり、国内では著名なフランス文学者だった。そのため、シンガポールでは若手に人気があり、担ぎ上げられたのだろう。シンガポールから国内の新聞社や雑誌に記事を送っている。1915年12月25日に国内で亡くなったが、没後遺稿集として『図南録』が刊行されている。

一方、中野光三は福岡県出身で、長崎医学校を卒業後、1894（明治27）年にシンガポールに到来した。在留邦人が少ない中、マレー地域で最初の医院を開き、長く在留邦人のドン的存在だった。両者の言い分はことごとく異なっていた。

８．西有寺の開山

10月、三井物産の林徳太郎が香港に移動になり、大村得太郎が着任した。

11月、福田の南洋新報社は、シンガポールの風物と日本商店や日本人のゴム園を紹介した写真集『南洋畫報』をシンガポールで刊行した。これはシンガポールで印刷・発行された初めての日本語書籍（英訳付き）で140枚余の写真が掲載された。『畫報』には、三井物産支店を始め、シンガポールの主要な商店の写真が収録されたが、日本人会派の商店である長野実義の大和商会、伊藤友治郎の新嘉坡日報社、西村竹四郎の西村医院などは載らなかった。一頁一店舗の写真であることから、当然広告費として福田は各商店に請求をした。日本人会派はむしろ掲載を拒否したのだろう。

11月13日、シャム国王の即位式に参加する名古屋日暹寺住職日置黙仙一行がシンガポールに寄港した。黙仙は後に永平寺第66世貫首や第9代曹洞宗管長となった名僧で、釋種楳仙の要請による西有寺開山のための訪問だった。港には三井の大村と釋種楳仙、二木多賀二郎などが出迎えた。14日、黙仙はセラングーンの日本人共同墓地で持参した諸尊像と西有穆山（にしありぼくざん）老師の木像を奉安し、この寺を西有寺と命名した。二人は在留邦人の求めに応じ播磨ホールで中野医師の司会による講演会を開いた。100名余が参加したが、昼間の開催だったためか、銀行や会社関係者は少なかったという[65)]。写真館の東郷社は、開山式後の集合写真を絵葉書にして販売した。図32、33は帰国後黙仙自らが1912年4月5日に名古屋から投函したものである。

図32　日置黙仙を囲んで開山式の記念絵葉書（東郷社作成）

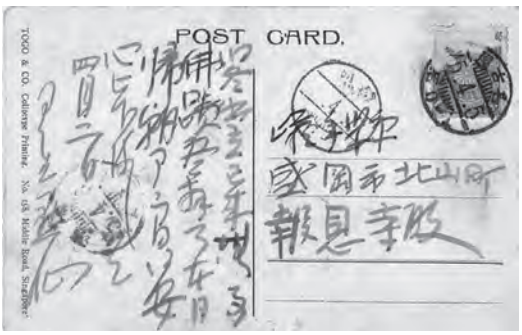

図33　帰国後黙仙が、明治45年4月5日に名古屋で投函した

図34　日本人墓地の二木（左）と楳仙（『南洋画報』）

12月3日、三井物産大村得太郎夫人が亡くなり、この日葬儀が行われた。

12月19日、シャム訪問を終えた日置黙仙一行が再び訪れた。先に寄港した時に行う予定だった開堂式は、新堂が未完成だったために延期していた。そのため11月は入仏式と命名式だけを行い、今回開堂式を挙行することになったのである。集まった日本人は数百名に達した。その後、「型ばかりの法器を打鳴らし、先ず祝聖の読経をなし、次に先亡五百余の霊位に回向し」た。この時すでにシンガポール近辺で亡くなった人は500名を超えていたのだろうか。釋種楳仙が西有寺の沿革を記した記念碑もこの日除幕された。

楳仙は、この時胃がんに犯されていた。黙仙一行は、シンガポールを発った後、インド巡礼中のボンベイで、西有寺の媒仙が遷化したことを知ったが、それはその地で読んだ『南洋新報』によってだった[66]。

黙仙に同道した来馬琢道は言う。

> 日本人の読む為に発行する『南洋新報』といふ一週二回発行の新聞や『自由評林』といふ週刊新聞や『星嘉坡日報』といふ謄写版刷りの新聞などがあって最近の時事は此新聞を読めば判るやうになって居る[67]。

12月25日、伊藤友治郎の『星嘉坡日報』が、ついに廃刊に追い込まれた。

9．明治末年の日本人社会

明治45年、1912年を迎えた。岩谷副領事は、在留邦人の勧告を受けた伊藤が、1月6日に夜逃げ同様にしてシンガポールを出国した、と外務省に報告した。ミスヨの長男知千代が病気だったため、二人をシンガポールに置いたままだった。母子は5月14日に神戸に帰着している。

伊藤が要視察人甲号に編入されたことは、『星嘉坡日報』の運営に大きな痛手になった。1910年に幸徳秋水たちが企てたとされる大逆事件は、世間の大きな関心を呼び、その一人大石誠之助との関与を疑われた伊藤夫婦は厳しい立場に置かれたのだろう。大石は一時期シンガポールで医師を務めていたことがあり、シンガポール古参者にとっては馴染のある名前だった。

伊藤友治郎は片山潜たちと親交があり、また国内に於いては廃娼運動にも取り組んでいたため前科12犯の汚名を着せられたが、そのほとんどは出版法違反や警官侮辱罪などだった。シンガポールでも廃娼をうたい、娼館関係者との対立は激化していた。

一方、伊藤友治郎の義理の息子である伊藤浪韻（知千代）は、友治郎の出国は、中国での革命の動きに同調したのだという。このころ、『新嘉坡サンデー』を出したことのある満州秋田潔が、南京で活動しているという風評が立っていた。

> 「よいしょ。僕も一つ革命に行って見るかな。」と同じく思い尻を持ち上げたのが外でもなく日報社の伊藤香夢氏であった。簡単な鉄筆と謄写版を弊履の如く叩き捨てて南京に走った。山本氏にも「いかんか、行け」とばかり熾んに勧誘したらしいが、流石の山本氏も革命では歯医者と一寸商売異ひだからと遠慮したらしい。兎も角、茲に、星嘉坡日報の寂滅が来た理であった。それは明治45年も春尚浅き頃であった。
>
> 恁くて茲に邦人の操觚界にはかの青年会擁護派の南洋新報独り舞台の壮観を呈したのである。

1912（明治年45）年2月、日本国内で塩見平之助が『南洋発展』を発行した。

1912年、13年と二度にわたり南洋を視察し

た中井錦城は、自ら朝鮮で邦人新聞創設に関わった経験があり、また伊藤友治郎がソウルで『京城民報』（1905年ころ）を発刊した時の支援者でもあった。13年には、『星嘉坡日報』は既に廃刊となっていたが、中井は『南洋新報』の発展を喜び、日本人商業会議所設立の必要性を訴えた一文を寄稿したという。南洋新報社長は、中井に『南洋画報』の一巻と二巻を訪問の都度贈っている[68)]。

7月4日、中野光三たちが集まり、ハリマホールで青年会総会を開催した。山本たちの日本人会派はこの会に招かれなかった。

7月14日、再び活動を開始した青年会に対し、山本作次郎は『自由評林』を復刊し、中野派やそれに組する岩崎副領事に対して強烈な批判を再開した。

7月30日、明治天皇が亡くなり、明治時代が終焉した。『南洋新報』と『自由評林』はそれぞれ号外を出して在留邦人に配布した。

日本人会派と青年会派の対立は相変わらず続き、正式な日本人会が成立するまでにはまだもう少し日時が必要だった。

＊本稿は、科挙研究費補助金基盤C（2012年～2014年）及び中部大学特別研究費A（2012年～2013年）の「南洋における日本人社会の形成と変遷」研究によるものである。

掲載した写真などはすべて筆者が所有するものである。

【注】

1）シンガポール日本人会『南十字星：シンガポール日本人社会の歩み』1978年、『シンガポール日本人墓地　写真と記録』1893年、改訂版　1993年、『戦前シンガポールの日本人社会　写真と記録』1998年　改訂版　2004年
2）Lim Shao Bin“Images of Singapore from Japanese Perspectives (1868-1941)”『日本人が見たシンガポール　明治・大正・昭和（戦前）』Japanese Cultural Society, Singapore 2004
3）西岡香織『シンガポールの日本人社会史「日本小学校」の軌跡』芙蓉書房出版 1997年
4）清水洋・平川均『からゆきさんと経済進出－世界経済のなかのシンガポール－日本関係史』コモンズ 1998年
5）James Francis Warren ”Ah ku and karayuki-san : prostitution in Singapore, 1870-1940” Oxford University Press, 1993
6）南洋及日本人社『シンガポールを中心に同胞活躍　南洋の五十年』1937年（シンガポール日本人会による復刻版がある）
7）佃光治『南洋の五年有半』南洋及日本人社　南洋及日本人社1920年、南洋及日本人社『馬来に於ける邦人活動の現況』1917年、辻森民三『新嘉坡てびきぐさ』花屋商会書籍部　シンガポール1926年
8）「戦前期日本マラヤ関係文献目録」『マラヤ占領期文献目録（1941-45年）』龍渓書舎　2007年
9）福田天心『南洋画報』南洋新報社　シンガポール1911年、『南洋時代』主筆辻森民三1930年6月からシンガポールで刊行、伊藤友治郎『南洋群島写真画帖』南洋調査社　ペナン　1914年
10）外務省外交史料館史料　海外在留邦人本邦人職業別人口調査一件　7-1-5-4
11）入江寅次『邦人海外発展史　上』P.236 復刻版　原書房　1981年
12）樋口直樹「シンガポール日本人墓地のこと」シンガポール日本人会『シンガポール日本人墓地』
13）塩見平之助『南洋発展』大来社　1912年　P214
14）村岡伊平治『村岡伊平治自伝』南方社　1960年 P.50-82
15）横田陟「シンガポールに於ける日本企業の生い立ち　企業進出第一号三井物産シンガポール支店120年の歴史と変遷　坂の上の雲シンガポール版」『シンガポール2012　夏号』シンガポール協会
16）村岡伊平治『村岡伊平治自伝』南方社　1960年 P.82 楳仙のシンガポール到来時期については、南洋及日本人社『南洋之現在』（P.131）は、明治25（1892）年としている
17）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B0709097370　新嘉坡在留帝国臣民七十一名総代千葉県平民渋谷吟治ヨリ陸軍へ五百八円、六十九名総代長野県平民二木多賀治ヨリ海軍へ金五百十円軍資金トシテ献納ノ義願出ノ件　外務省外交史料館
18）『東京朝日新聞』1895年8月10日
19）『殖民協会報告第35号』（96年3月25日）殖民協会『殖民協会報告　復刻版』不二出版　1986年
20）中野光三「南洋生活三拾年」河野公平編『南洋総覧』好文館出版部　1920年　P.39~40
21）車田譲治『国父孫文と梅屋正吉』六興出版　1975年　P. 57-66
22）『東京朝日新聞』1897年7月15日
23）柴田幹夫「博士論文　大谷光瑞の研究－アジア広域における諸活動－」P.115 http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/metadb/up/diss/o4211_3.pdf#search='%E4%B8%

89%E6%A0%B9%8%8B%B1%E4%BA%8C+%E3%82%B7%E3%83%B3%E3%82%AC%E3%83%9D%E3%83%BC%E3%83%AB'

24）同上

25）葦名信光『釈尊御遺形奉迎紀要』大日本菩薩会本部　1902年　P.12-14

26）農商務省商務局『海外実業練習生一覧』1915年

27）中村直吉『亜細亜大陸横行』、『南洋印度奇観』博文館　1910年

28）「新嘉坡の四十七時間」『紫風全集』鶏声堂　1907年

29）大田彪次郎、渋沢栄一編『欧米紀行』文学社　1903年　P.411

30）外務省通商局編『海外日本実業者の調査』第1巻　不二出版　2006年

31）JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.B07090984000日露戦役二際シ軍資金献納雑件／欧州其他ノ部

32）同上

33）『東京朝日新聞』1905年6月18日付　図南生

34）Mark R. Frost ”Singapore A Biography” P.160

35）Peter J Rimmer & Lisa M. Allen “The Underside of Malaysian History, Pullers, Prostitutes, Plantation Workers” 1990, Singapore University Press

36）松井茂『東洋警察見聞録』警察協会出版部　1901年 P.33～34

37）西村竹四郎『在南三十五年』安久社　1936年

38）長田秋濤『図南録』実業之日本社　1917年

39）小河内五橋『立志小説　殖民王』有朋館　1907年

40）倉橋正直『島原のからゆきさん　奇僧・広田言証と大師堂』共栄書房　1993年

41）西村竹四郎『在南三十五年』 安久社　1936年

42）伊藤浪韻「新聞紙」『南洋時代』Vo.4 No.3　1933年

43）西村竹四郎『在南三十五年』 安久社　1936年 P.126

44）例えば、村上好重「シンガポール日本人社会小史」、シンガポール日本人会編『シンガポール日本人社会の歩み　南十字星』P.38 など。

45）外務省外交史料館史料、『南洋年鑑　付南洋興信録』

46）香夢園主人「赤道直下に於ける日本人雄張の跡」（『南洋時代』第2巻16号、1931年）

47）原不二夫『英領マラヤの日本人』（アジア経済研究所　1986年）の日本・マラヤ年表には、1908年『星嘉坡日報』創刊、09年『南洋新報』創刊（週二回、13年日刊、15年廃刊）とある。

48）「新聞紙」『南洋時代』1933年1月15日号（4巻2号）から（4巻20号）『南洋時代』は大阪市立大学図書館、台北大学図書館、台湾史研究所図書館所蔵のものを借用した。

49）池田貢一『成業の指針　富策全』（1913年）に掲載された、南洋新報社気付釣田時之助宛葉書の消印（1909年12月16日バンコク）による。釣田の『南洋の富』（三光堂　1912年）掲載の1910年の帝国領事館調査では、シンガポール在留邦人の職業欄新聞に、福田、伊藤の名前がある。

50）『南洋畫報』の奥付による

51）伊藤友治郎については、青木澄夫「解説　南洋年鑑と伊藤友治郎」『南洋年鑑　全4巻』復刻　龍渓書舎　2011年を参照。また伊藤の経歴、活動については内務省警保局作成の「社会主義者沿革」に詳細に記述されている。社会文庫『社会主義者・無政府主義者　人物研究史料（1）』柏書房　1964年に所収

52）西村前掲書　P.112

53）矢部英夫「赤裸々な我生涯」『ジャガタラ閑話』P.71

54）「新嘉坡の日本青年」『実業少年』3巻14号　1909年

55）『シンガポールを中心に同胞活躍　南洋の五十年』P.503

56）竹越與三郎『南国記』二酉社　1910年

57）遠航記念帖編纂委員『練習艦隊軍艦阿蘇宗谷巡航記念写真帖』1910年

58）『南洋便覧』発行所：シンガポール・タンゲガロン街南洋便覧編纂所、印刷：東京、販売：矢ヶ部商会）

59）馬来半島の地図と商店等の写真は、『戦前シンガポールの日本人社会　写真と記録』の内表紙に掲載されている。

60）『南洋畫報　第一巻』（写真11）

61）塩見平之助『南洋発展』

62）『シンガポールを中心に同胞の活躍　南洋の五十年』P.494

63）川上瀧彌『椰子の葉蔭』六盟館　1915年　P.15

64）『南洋総覧』P.42

65）来馬琢道『黙仙禅師南国巡歴記』平和書院　1916年 P.46-58

66）『黙仙禅師南国巡歴記』P.832

67）『黙仙禅師南国巡歴記』P.373

68）中井錦城『南洋談』糖業研究会出版部　1914年 P.157